肝心かなめの

肝臓のはなし

⑬

香川大学医学部消化器・神経内科教授
正木　勉

Ｃ型肝炎ウイルス駆除後のフォローの重要性

前号で、Ｃ型肝炎ウイルスは今では簡単に経口剤で駆除できることを述べました。今月号のテーマは、「Ｃ型肝炎ウイルス駆除後は、肝細胞がんに進展しないのか?」。答えは残念ながらＮＯです。

香川県内の９９５例のデータを観察すると、経口剤による治療後、２年で約3%の人にがんが発生しています（図１）。

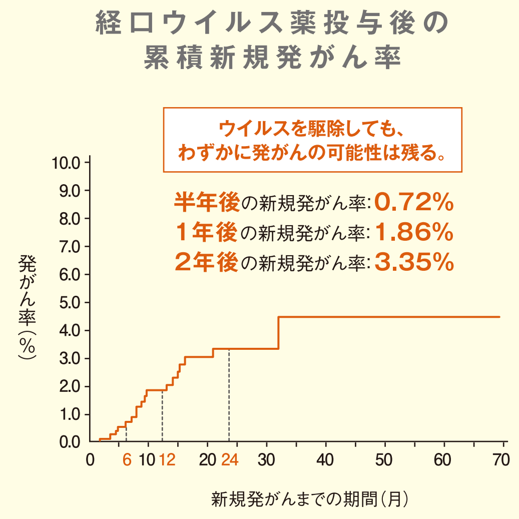
もちろん10月号でお話ししたように、Ｃ型肝炎ウイルスを駆除すると、肝細胞がんの発生頻度は明らかに低下します。

それなのに、なぜＣ型肝炎ウイルス駆除後２年で、３％（ウイルス駆除患者１００人のうち３人）もがん発生率があるのか。副作用が少ない経口ウイルス薬は、これまでの治療できなかった肝硬変でも治療できますが、Ｃ型肝炎ウイルスを駆除しても、がんの発生しやすい肝硬変が残るからです。この肝硬変を改善するには、Ｃ型肝炎ウイルスを駆除するよりも時間がかかります。

よって、特に肝硬変になった段階でウイルス駆除をした患者は、その後も少なくとも年４回の腫瘍マーカーと、年２回の画像検査（負担の少ない腹部エコーなど）を受けることが大切です。

〝ウイルスを駆除したら絶対安心〟ではないことに注意してください。定期的に専門医に受診することが重要です。

次号は、Ｂ型肝炎、Ｃ型肝炎の撲滅を目指した香川県の取り組みについてお話ししたいと思います。


経口ウイルス薬投与後の累積新規発がん率

（図1）